

「津野山神楽」の伝承過程における後継者育成の現状と課題に関する研究

1150468 古田 春菜

高知工科大学マネジメント学部

1. はじめに

1.1 概要

本研究では、高知県の西部に位置する梶原町の伝統文化である「津野山神楽」を対象として、津野山神楽の演舞内容とそれが持つ意味を理解した上で、津野山神楽と地域との繋がり、及び津野山神楽の次世代への文化伝承の在り方について明らかにした。その結果、津野山神楽は神楽保存会が中心となって高校生に対する指導など積極的に保存活動に取り組んでいる。しかし、少子高齢化の波は、津野山神楽でさえも地域との関わりが徐々に薄くなってきている影響を与えている。今後、津野山神楽の文化伝承にあたっては、親から子への文化伝承の流れが重要である。この流れを通して、伝承者の深層の中で津野山神楽が生き続けることが必要であり、1人でも多くこのような伝承者を作ることが求められる。

1.2 背景

日本は地理的位置により、四季が明瞭に分かれている。日本人は、これまで自然とともに生活を送ってきた。自然には癒しを求めたり、時には私たちの生活に被害を及ぼしたりしてきた。そこで、日本人は自然から得た恵みを神の御利益と考え、春の栽培前や秋の収穫後などを節目に神々にお祈りをする風習が定着してきた。神楽は、神々と地域の人々と交流する場として、古来から地域の神事や娯楽として位置づけられてきた。このような地域の伝統芸能は、地域の存在意義を再確認する場であるとともに、地元に対する愛着を深める 1つのアイテムなのである。しかし近年、中山間地域では、少子高齢化に起因して若年層の減少が急速に進行しており、後継者不足のため舞手が存在せず消滅の危機に瀕している事例のほか、舞手を地域外に求め存続を図っている事例も見受けられる。その中で、高知県の梶原町の津野山神楽は、神楽保存会を軸に普及活動に取り組み、地域の中に深く浸透している結果、現在も様々な課題に直面しつつも存続している。津野山神楽の事例を調査することは、同様に存続の危機に瀕している伝統芸能の伝承方法の参考事例となるだけでなく、「地域」の在り方を再検討する材料になり得ると考えられる。

1.3 目的

津野山神楽の伝承における現状と課題を明らかにし、次世代への文化伝承の方向性を提案する。

1.4 研究方法

本研究は、はじめに既往文献調査を行い、他県の伝統芸能の在り方、文化伝承の手法を整理する。次に、津野山神楽の現状、課題を把握した上で、津野山神楽保存会の方や高校生、梶原町の地域住民の方にヒアリング調査とアンケート調査を並行して行い、その結果を分析する。最後に、津野山神楽の後継者育成の現状と課題を明らかにする。更に、次世代へ津野山神楽を継承していくための提案もする。

2. 土佐の神楽の概要

2.1 神楽とは

神楽とは、日本の神道の神事において神に奉納するために奏される歌舞のことである。神社の祭礼などで見受けられ、平安中期に様式が完成したとされており、現在、日本全国に約 3000 を超す神楽団が存在している。神楽は、宮中の御神楽と民間の里神楽の 2 種類に大きく分けられているが、里神楽は、巫女、神主、山伏といった人々によって伝承されてきた。全国的に広がる神楽は、各種各様であるが、一貫した特色としては、必ず神座を設け、神々の招請をもって執り行うことが挙げられている。また、幾つかの神社では、近代に作られた神楽も行われている。

2.2 土佐の神楽

高知県には、四国山地に沿った東西一帯に多くの神楽が伝承されている。それが土佐の神楽であり、主に鉦、榊等々の採り物を手にしての舞や記紀の神話を素材にした劇的な舞などから構成される出雲神楽の系統に分類することができる。また、土佐の神楽は全部で 9 つありそのうちの 1 つに津野山神楽も含まれている。そして、土佐の神楽は中山間地域に多く伝承されており、人手不足のため後継者育成について対策を講じている地域もある。土佐の神楽は 1980 年 1 月 28 日に国の重要無形民俗文化財に指定された。

3. 津野山神楽の概要

3.1 歴史・文化

913年、藤原経高が津野山郷へ入国し、伊予の国より三嶋神社を勧請して守護神として祀られた時代から、代々の神官によって歌い継がれたものとされている。1945年の敗戦と神楽修得者の減少により、一時廃れかかっていたが1948年に神楽復興の気運が起こり、津野山神楽保存会が設立された。それまでは、代々特定の神職により、世襲的に歌い、舞い継がれたがこの技を修得している唯一の神職、掛橋富松翁を師として旧習を破り、村内各地区より推された青年10数名に口伝により伝承講習された。津野山神楽は、1年の五穀豊穰に感謝する秋祭りで、町内の各地区で奉納される。舞は、18節からなり、全体を通して正式に舞納めるには約8時間を要する。各節で登場人物や場面は変化していくが、全体を通して神話に基づく大きな物語の流れがあり、急テンポの楽に合した舞で優美荘重である。

3.2 津野山神楽奉納の手順

初めに、神楽を舞う日の前後に「神祭」を行う。神祭は、神を祭ることを意味し、秋に農作業が落ち着き、今年も豊作であったことへの感謝の気持ちを込めて、地域の方々とお祝いをするのである。このような話の流れは、津野山神楽の演目の中にもあり、神楽と神祭は深く関係していると考えられる。次に、神楽を舞う日の午前「御神幸(おみゆき)」が行われる。御神幸とは、牛鬼を先頭に神輿などの行列が地域を練り歩くことである。牛鬼が、その区の家を一軒一軒回って挨拶をすることが風習なのである。そして午後、「津野山神楽」が神に奉納されるのである。秋祭りでは、約2~4時間程度で、演目はその日の状況に合わせて行われている。最後に、無事奉納できた感謝の気持ちと津野山神楽保存会の方々の反省会も含めて「なおり」という飲み会が行われる。このように「神祭」「御神幸」「神楽」「なおり」という4つの流れがあることで、津野山神楽と地域の方を繋ぐ1つの文化になっていると考えられる。

3.3 津野山神楽の現状

以前は、梶原町に位置する6区全てで舞われていたが、現在は、4区(四万川区・越知面区・東区・西区)で毎年同じ時期に舞われている。(表1参照) 初瀬区及び松原区等は、その年に行事ごとがあれば保存会の方々が舞に行くようになっている。

表1. 津野山神楽の奉納日時

春	三嶋五社神社(四万川区)
10月30日	三嶋神社(東区)
11月3日	三嶋五社神社(越知面区)
11月23日	三嶋神社(西区)

4 津野山神楽を対象とした社会調査手法

4.1 津野山神楽の現地視察

(1)目的:津野山神楽を舞っている現場を視察することで、舞の意味や特徴、周囲の状況等を確認し把握するため。

(2)内容:平成25年10月30日(東区)・平成26年10月5日(四万川区)、11月3日(越知面区)、11月23日(西区)の計4回、実際に現地の雰囲気や、区ごとに地域住民の方々がどのように関わっているのかを調査した。

4.2. アンケート調査

(1)目的:津野山神楽の現在と将来について把握し、後継者育成の課題を抽出する。

(2)対象:梶原高校生1~3年生の中で、総合学習で津野山神楽を選択している男女30名を対象に調査を実施した。

(3)日時:平成26年10月30日

(4)方法:総合学習の担当教員に渡し、翌日の朝学活時に配布、終学活時に回収していただき、後日私が受け取りに行く方法で行った。

(5)項目

- ・総合学習で津野山神楽を選んだ理由
- ・津野山神楽の魅力や特徴あるいは、難しいところ
- ・社会人になっても、舞人として神楽の時に舞いたいのか
- ・津野山神楽の18節の中で好きな舞は何か
- ・津野山神楽は梶原町にとってなくてはならない存在か
- ・将来、神楽保存会に入り津野山神楽を今後も後輩や地域の為に繋げていきたいと思うか

4.3 津野山神楽保存会と地域住民を対象としたヒアリング調査

4.3.1 津野山神楽保存会

(1)目的:津野山神楽の伝承過程を調査し、現状と課題を明らかにする。

(2)対象:30代女性、40,60代の男性、計3名を対象に調査を実施した。

(3)日時:平成26年11月3日、11月20日

(4)方法：津野山神楽に対する思いや、今後の展望等のヒアリング項目について、現場の声を聞き、整理した。

4.3. 2 地域住民

(1)目的：神楽と地域との距離感や繋がりを調査し、現状と課題を明らかにする。

(2)対象：30, 60, 70 代男性、計 3 名で、梶原町出身であるが神楽を舞わない方を対象に調査を実施した。

(3)日時：平成 26 年 11 月 3 日・平成 27 年 1 月 28 日

(4)方法：津野山神楽の存在感あるいは神楽を舞わない理由等のヒアリング項目について、現場の声を聞き、整理した。

5. 結果

5.1 津野山神楽との関係図

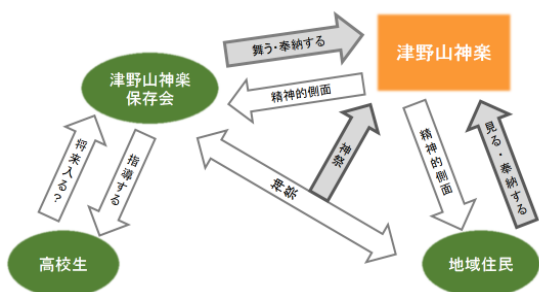


図 1. 関係者マップ

津野山神楽との関係者には、津野山神楽保存会、高校生、地域住民の 3 つのグループに分けることができ、梶原町民は津野山神楽と何らかの形で関わっていることがわかる。

5.2 高校生のアンケート結果

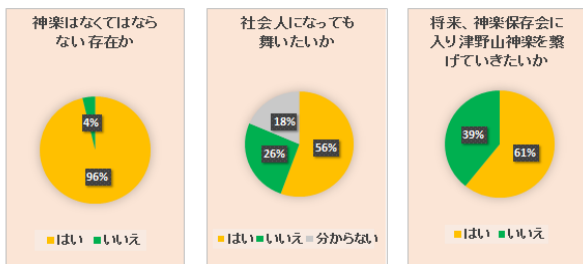


図 2. 高校生のアンケート結果

図 2 に示すように、津野山神楽は必要であること、社会人になっても舞いたいと思う人は多いと分析できる。また、津野山神楽を繋げる意志を持っている人も約半数ほどはいることより、津野山神楽は無くってはならないものだといえる。

5.3 ヒアリング結果

津野山神楽保存会の方々は、神楽に対して強い思いがあり、1 人でも多くの方にとってもらうために日々、努力されていると分かった。地域住民の方は、津野山神楽保存会の方よりも神楽に対する思いは薄れていると感じたが、梶原町には無くってはならない存在であるという意思は強かった。

5.4 津野山神楽の伝承過程の現状

(1)舞そのものの視点：基本、神楽は楽に合わせて舞うが、津野山神楽の場合は、舞手为中心であり舞手の足を見ながら、楽担当の人が音を合わせているのである。そして、津野山神楽保存会の方々は各自 DVD を見て舞を覚え、週に 1 回全体練習時に年配の方に細かい指導を受ける。秋祭りの時期には、週 1 回の全体練習は行わず、本番の祭りにおいても日々の練習と位置づけて津野山神楽を舞っている。

(2)文化伝承の視点：親から子への文化伝承の流れも見受けられた。また、神楽大会等にも出場し、好成績を収めて多くの方に知ってもらっている。

(3)舞手個人の視点：津野山神楽は、自分自身を高めるものの 1 つの手段であり、年代は違っても、多くの方は津野山神楽に誇りを持っていた。

(4)地域との関係性：幼い頃から秋祭りに行き、津野山神楽を見ているから太鼓等自然と叩ける子どもは多かった。「津野山神楽は梶原町にはなくてはならない存在」であるという認識はあった。

5.5 津野山神楽保存会における課題

現在、津野山神楽保存会には 10 代 1 人、20 代 1 人、30 代 8 人、40 代 5 人、50 代 6 人、60 代 5 人、70 代 2 人、80 代 2 人の計 30 名ほど参加されている。保存会に入るには、梶原町出身である必要はないが、継続するには梶原町出身であることが望ましいのである。年齢別に見ても、後継者が少なく危機的状況なので、小・中・高校生に津野山神楽の魅力を知ってもらうために、総合学習や授業の 1 つに神楽を体験できるシステムを導入している。しかし、総合学習で津野山神楽を体験しても、実際に神楽保存会に入り舞い続ける人は約 1 割程度が現状である。

5.6 地域住民における課題

1 つ目に津野山神楽の持つ意味を 1 人でも多くの人が明確に知る必要があると考えられる。2 つ目は、津野山神楽と

関わりが深い神祭は、昭和天皇が崩御された時に自粛になり、今では数件の家庭で行っていること。そして区ごとに津野山神楽を舞うが、最後まで地域住民の方は見ず、途中で帰ってしまう行動を見た結果、地域との関わりが薄くなってきている可能性が高いと考える。

5.7 高校生における現状と課題

高校生は、もともと神楽に興味を持っており、小・中学校で津野山神楽を経験していたから総合学習で津野山神楽を選択したという答えより、生まれ育った時から神楽があり、神楽があつて当たり前存在であることがいえる。しかし、将来舞手となって津野山神楽を継承していきたいと思う人は約半数になってきている。その原因に、若者ならではの県外に出てみたいという好奇心であり、自分自身が主体となって舞いたいと思う人の少なさであると考えられる。

5.8 松原区における津野山神楽保存会の衰退原因

松原区では、1963年に初めて掛橋富松翁により10数名に伝承された。当時は賑やかで、小学校でも津野山神楽を指導していたが、少子高齢化が原因で廃校とともに無くなり、神楽保存会でも練習のきつい等の理由で徐々に人々がやめていった。現在は、3名程保存会に参加しているが、高齢のため舞うことができず継承が困難で自然消滅も有り得る。やはり、親から子への文化伝承の無さが文化伝承の衰退原因と考えられる。

6. 次世代への文化伝承の提案

本研究の調査を行う中で、津野山神楽の歴史や地域との繋がり、津野山神楽保存会、地域住民の方、そして次世代を担う梶原高校生の率直な意見をお伺いできた。そこで、私は2つの提案を挙げることで津野山神楽の次世代への文化伝承に繋げていきたいと考える。まず、1つ目は親子世代との関わりを強く持つことが挙げられる。やはり、親が太鼓を叩いていけば、子どもも自然とその太鼓の音が染みつき、自分も叩けるようになるからである。このよう繋がりを持つことで、津野山神楽が生き続ける原動力になると考えられる。2つ目は、梶原高校で行っている総合学習を続けていくことである。津野山神楽を学生時代に経験した人が、社会人になり津野山神楽保存会に入る人は1割程度でしかない。しかし、10人、20人と津野山神楽を経験する人が多くなれば、たとえ1割でも人数は10年後、20年後の後継者に少しでも繋がると思

るからである。また、捕捉として津野山神楽を継続的に伝承していくには、梶原町で在住することが望ましくなる。ということは、梶原町で自分自身が働きたいと思える場所、つまり雇用制度の見直しも関係すると考えられる。

7. まとめと今後の課題

7.1 まとめ

・津野山神楽は、敗戦により一時廃れかかっていたが、津野山神楽保存会の設立により、現在も後継者不足であるが存続している。その後継者不足の対策として、梶原町内の教育機関で津野山神楽の歴史や舞そのものについて積極的に指導している。

・やはり、家庭内や幼少期の頃に実際に、津野山神楽を直接的に見聞きしているので、梶原町民は身体で津野山神楽を記憶している人が多い。しかし、津野山神楽を最後まで見ずに帰る地域住民も見受けられ、高校生の津野山神楽に対する継承する意識調査の結果、地域と津野山神楽との関わりが薄くなっていると考えられる。

・津野山神楽を今後も伝承していくには、「人」が必要である。だが、急に舞うことも太鼓を打つこともできない。となると、幼い頃から津野山神楽を見て育ち、親から子へ伝承できる環境が1番好ましいと考えられる。そして、1人でも多くの人の心に津野山神楽が生き続け、伝承することが求められる。

7.2 今後の課題

・津野山神楽が廃れてしまえばどうなるのか、どうして守らなければならないのかという原点を明確にし、発信していかなければならない。

・梶原町を6つに分けた区でも、区ごとに特性、特徴などは異なっているので、津野山神楽に対する思いや位置づけを区ごとに調査する。

・津野山神楽以外に、高知県の神楽は次世代の文化伝承に対し、どのような取り組みを行っているのか調査し、結果を比較する。

参考文献・引用文献・協力者

- [1] 中島奈津子 2013『早池峰神楽の継承と伝播 - 東和町における弟子神楽の変遷』佛教大学
- [2] 星野紘 2012『過疎地の伝統芸能の再生を願って』国書刊行会
- [3] 笹原亮二 2003『三匹獅子舞の研究』思文閣出版
- [4] 川野裕一郎 『次世代への神楽の伝承』
- [5] 高崎義幸 『「広島神楽」の伝承過程と興隆に関する社会学的研究』
- [6] 津野山神楽一全 18 節鑑賞ガイド
- [7] 梶原町役場/松山様
- [8] 津野山神楽保存会の方々
- [9] 梶原高校/津野山神楽の指導教員及び生徒の方々
- [10] 梶原町の地域の方々